

富士川游先生没後五十年に寄せて

宗田 一

富士川游先生の没後五十年を記念した式典と講演会・記念展示会は、別掲のように盛大に行われ、先生の偉大な足跡をあらためて参加会員一同に強く印象づける好機となった。

ところで、富士川游先生が昭和十五年（一九四〇）十一月六日、七五歳で没された当時の医史学の動向については、岩熊哲の論考「富士川博士亡き後の日本医史学」が参考になる。

岩熊は、この論考（一六年一月『医事公論』所収、のち一八年一二月刊の遺稿集『医史学論考』に再録）をいち早く執筆し現状に警告をならしているが、この内容は、先生没後五十年の今日でも耳を傾けるものを含んでいるので、この記念式典がもたれた機会に、会員一同あらためて岩熊の言葉を噛みしめることが、今回の記念行事を有意義にするものであらうと、私は当日の閉会の辞でふれておいた。

岩熊は次のように言っている。

「この頃、『富士川博士なき後の医史学界』という言葉を目にする機会が多い。」とした上で、「……博士在世中は、日本の医史学といえは直ちに博士その人、乃至その著述を連想するくらいに、斯学と博士とは不可分の関係にあった。わが医史学の育ての親なる博士は、あたかも其の代名詞の如くであった。代名詞の如き斯学の中心人物は、いまや溘然と消滅した。博士亡き後の医史学は、これを喩えれば一村を圧して鬱蒼と茂っていた大樹が、時あって忽焉と倒れ、天界とみに寂寞となったかのような感慨を催すのである……」とし、「富士川博士時代の医史学は終末をつけ次の新しい階

梯に入った」と認識し、現状をみつめ将来への抱負を述べている。

富士川先生のあとは、藤浪剛一理事長（第四代）となり、そのあとは山崎理事長（第五代）となった。山崎は、一八年一月一二日の藤浪博士追悼講演会における理事長就任挨拶として、「医史学研究の必要と医史学会の使命」（『日本医史学雑誌』一三一一三号）と題する講演で現状批判を次のように言っている。

「……最も肝心のことは、（医史学会は）『学会』であって、趣味や道楽の会合でない。好事家的、趣味的医史学は、医史学を愛好するといいながら、知らず知らず医史学を墮落せしめ、鼻貞の引き倒しになって、医史学として迷惑この上ない。」

富士川先生に対し個人的に尊敬をほらい、「先師」の言葉をもって師礼を尽して来た山崎にとって、先生亡き後の医史学界は、富士川医史学の亜流がはびこっている現状をみつめ、その風潮に対し警告を発したものだだった。

今次大戦後における医史学の発展は、日本医学史で従来定説とされて来た事項に大幅な修正を加える国内の研究動向と合せ、国際交流が容易になって、先人のはたされなかつた海外情報による補訂も可能となって来て、新しい研究動向が生れつつあるとはいえ、岩熊・山崎ら先達の右のような批判が、どれだけ克服され、期待にこたえる方向に進んでいるかを反省する機会が、今回の記念行事を介して与えられたことを、会員一同噛みしめる好機となるならば幸甚である。

（日本医史学会理事長代行）